

大学放浪記 (53)

伊藤信孝

マエジヨ大学客員教授・国際学部

2019年の暮れに日本に一時帰国して、翌年1月7日にタイに戻った。折しもコロナ禍が話題になりかける時である。それ以後事態は深刻になり、ロックダウンや、自宅勤務、オンライン、予防接種など矢継ぎ早にいろいろな対応が必要となった。予防接種しても良くなるのかどうかと言う見通しは不透明で、事態の推移に応じて対応するよう行政指導が行われた。タイ国内の州境を超えた移動も制限され、海外渡航は当然禁止となった。2020年の9月末を持って学部長の任期2期の修了でコンケーン大学に移動する事になったが、コロナ禍の状況は改善の兆しも無く、折角受け入れをして頂いたコンケーン大学でもオンライン授業（といっても回数は少なく特別講義で学部生や院生への講義が数回もあったらうか）で大学に行っても人っ子一人居ない様な状況であった。とにかく教員、学生個々に対面、会話ができないのであるから、大学の外に出ることは殆ど無く、学生が実習を元にした1,2の企業に出向きお世話になった御礼と大学側からのセミナーを小1時間ほどして終わるとい、いささか筆者としては残念な気持ちであったが、状況が改善しない限り、どうしようもなかった。その様な状況が何時迄も継続するのではないかと懸念する声も有り、翌年もまた同じような事になるのではとのおもいも高まり、雇用状況と現実の実態からコスト・パフォーマンスを考えると、あまり勘定に合わない判断するのは自然でもある。また一般にタイの大学では雇用は1年を基本とし、その後は年ごとの契約更改となるのが普通である。早めに延長について打診をしたが、結果は当然NOと言うことで、9月末までの4ヶ月ほどで次の就職先を探す事になり、結果としてマエジヨ大学が手を挙げて頂き、受け入れ、雇用となった。急なこともあり最初はプロジェクトの予算で2回ほどビザ延長をクリアし、3度目でインターナショナル・カレッジ学部付けとなった。しかし再生可能エネルギー学部に在籍しているときも、これ迄の経緯、実績を考慮し、国際交流においても参加の機会を得た、その様な背景もあって昨年11月には筆者が立ち上げた交流事業にも参加の機会を得たが、時代の流れと共に、大学のみならず世代交代が進み、年長、高齢者との間に相互信頼を築くことは極めて難しくなって来ている。これまで続けてきた国際交流事業の更なる継続が難しくなって来ている。その最も大きな原因は事業に **Literature review** が成されず、その精神、フィロゾフィーが理解されていないからであり、それに輪を掛けたように新しく交流事業に加わる若い世代のやる気のなさ、自己本位の勝手な振る舞い、考え方が過去の経緯や、他大学との関係を理解もせず、自分がその役職に就いたのだから、俺のやりたいようにやると、まるで鬼の首でも取ったかのように勢い込んで自分流を通すから、折角積み上

げた事業の成果も一瞬に飛んでしまう。事業の継承には、前任者から学ぶ必要があるが、そうすることを恥と思う人も居る。なぜなら前任者に聴かなければできないのでは何がためにそのポストに自分が座わったのかと謂われはしまいかと考えて居るからである。事業の継続を優先して考えるならば、恥ずかしいと言う気持ちを棄てることである。また、前任者に分からない事を尋ねることは決して恥ずかしいことではない。聴かずに事業が衰退するより、恥ずかしくても聴いて事業が盛り上がることの方がより重要である。衰退凋落することはそれ以後の事業が無くなる事を意味する。事業が無くなることでどれだけ多くの潜在的参加者が自らの将来を失い、変えなければならない事になるかを考えれば明らかである。そうした責任を事業担当者が自覚しているかどうかである。残念ながら落ち目の大学、国際交流事業に遅れている大学の多くはそうしたエゴイステック (Egoistic) な担当者で占められていることが多い。上記したプライド、尊厳はこうした意味から極めて重要で、特に何事にも意志、関心がないのでは筆者が日頃から口にする **Hopeless University** そのものである。ここではその典型的な一例を示す。

筆者も関係するアジアの国際交流ネットワーク事業をチェンマイで開催したいと言う要望が海外の担当者からあり、チェンマイにある2つの大学が協力して実施することになった。2日間の予定でそれぞれの大学が1日ずつを担当する。その中に現地視察 (Field trip) がある。地方のコミュニティが実施の各種プロジェクトを見て回り、勉強するものである。一般に大学の元施設見学が普通ではあるが、できればその大学の強い分野、他大学、社会をリードしている分野、あるいは社会的にも脚光を浴びている研究などをその候補にとり上げる方が見学参加者、大学の双方に取っても有益である。言うまでも無く見学者は新しい知見を得ることが出来るし、大学も社会に向けて見学者を通じて、あるいはマスメディアを通じて知名度を上げる事が出来るチャンスでもある。社会から注目されれば受験者も増えるし、大学に対する評価も上がる。受験生も増えるし社会貢献にもなる。要するに、どのような視点からその見学先を選び、準備するかは大学の評価にも反映する。大学として自信とプライドを持って見せる事が出来るものがないと恥ずかしい、施設や設備も悪くはないが。他の大学にもあるような月並みな物ではなく、同じ設備ならそれを使って、どの様な優れた社会をリードする研究をしているかが視点となる。それが大学における事業担当者のプライドで有り尊厳につながる。見学先の選定においてもその重要性は変わらない。そこで一人の教員が担当者 (Coordinator) として任命された。2つの大学と事業開催依頼を持ち込んできたネットワーク担当者の3者で合同会議を開いたその場で、現地視察の候補地として、チェンマイの川の水の浄化プロジェクトが提案された。筆者はその担当者をよく知っているし、30年にも及ぶ旧知の仲である。その人物が定年退職後もその事業に深く関わり、コミュニティにも貢献していることを熟知している。筆者はその人物を紹介したり、連絡を取ったりすることを厭わないが、公式依頼はする立場にないので、上述の担当者をお願いした。また事業開催依頼者からも河川の浄化、環境問題の解決という観点で

参加者全員が見学するようにはどうかとの強い依頼もあった。そうした経緯もあり、筆者が連絡先の人物の氏名、電話番号、メールアドレスなどを知らせ、その担当者が直接連絡を取り依頼する事になった。10日ほどしてその担当者が筆者の所に来て、予算が無いので本件の依頼は「キャンセルしたい」と告げてきた。では見学は無くなるのかとたずねると大学の農場を見学させるという事であった。しかし予算が無いとは言え、これには不安があった。なぜなら6, 7年ほど前にも同じネットワークの参加者が来た時にもその場所を見学しているからである。その後目新しいトピックでもあれば価値はあるが、その後の進展、展開がなければ余り有益ではない。しかし予算が無いと言うのならどうにもならない。見学を取りやめる以外に無い。そうしてその案件はキャンセルになった。しかしその後、誰かが他の見学先を探していると言う話がライン・グループ上に流れた。予算がないのでキャンセルになったのに別の見学先を探すのは何故か？ 疑問に思っていたが、とにかくしばし見守ることにした。そして先日イベント開催依頼者がチェンマイに来たときの会議で驚くべき事が起こった。キャンセルされた知人がその会議にやって来たのである。コミッテイのチェアマンもCoordinatorも一言の連絡も無い。どうしてそうなったのか説明は未だに無いし、それでいて2人とも平気な顔をしている。後でわかった（と筆者は考える）が、そうした説明、迷惑を掛けた事への謝罪、をしなければならぬと言う事を知らない、あるいはする必要が無い、と考えて居る様である。事業依頼担当者がチェンマイに来るので2日間の予定をチェアマンがアレンジしたらしいが、メンバーには全く情報がシェアされていないから誰が何をするのか、何時何処に行けば良いのか、情報は皆無である。事業開催依頼担当者から個人的に、この日に学長に会うことになって居るので同席して欲しい旨、連絡が来たが、コミッテイのチェアマンからは何の連絡も無い。勝手に会いに行く前に学長室に「このような連絡が来たが、同行しても良いか」と尋ねると「Why not?」来ない方がおかしい、何故その様な事を聴くのか」という返事である。正直言って「大きなショックであった。そこですかさず、「何処に何時に行けば良いのか、コミッテイのチェアマンからは全く連絡が無い。本来この種の情報はコミッテイの会員全てに平等にシェアされるべきで、それはチェアマンの役割であると切り返しておいた。しばらくしてやっと簡単なプログラムが配信されてきたが、時間は書かれているが、場所が書かれていない。場所が知りたければ、私に尋ねてくれとある。正直言ってこのレベルの対応にショックであった。会議室に入ってしばらくすると、もう一人会議参加者が来るという。誰かと想って居たら、先に現地視察の件でキャンセルした知人であった。極めて驚きである。それでもチェアマンもコーディネータも一言も何も言わない。何と言うレベルの人と今まで国際交流と言う名前の下で付き合いしてきたのか、と言う悲しい思いでこれまでのイメージががらがらと崩壊するのを感じた。この瞬間から、これまでの大学のシステムに対し、「なるほど、こう言うことだったのか」という事実の再発見にも似た寂しさも同時に襲い掛かってきた。本当に驚きであった。事業実施依頼者が連絡してき

たラインのメッセージを見ても自分が車を持っている訳ではないし、大学の手配できる立場にもない。情報を得ても行動に移せない歯がゆさに、半ば諦めていた折に、知人のもう一人が、今から空港に出向いてその人を迎えに行くので、良かったらお前も一緒に行かないか、との誘いの電話が入った。何の準備をすることもなく、迫る客の着陸時間を頭に置きつつ、一緒に空港に向かった。到着の20分ほど前に空港につき国際線到着ロビーに客が現れるのを待った。ほぼ定時にその客は現れ、その後は夕食を共にして、客が見たい場所を簡単に案内し、出迎えの接待が済んでアパートに戻ったのが夜の8時半ほどであった。この小さな出迎えという行動についてもいささか疑問を感じた。「なぜ、チェアマンが直接出迎えるか、自分ができなければ大学の車を手配し、スタッフ或いはコミッテイのメンバーで都合が付く教員の誰かに指示しないのか？」という疑問である。夕食にしてもチェアマンが負担しても、あるいはできなければ公費負担でも良いのではないか、筆者や筆者の知人に丸投げという対応に、金銭的なこと以上に、そうした歓迎姿勢を見せることを知らないのではないか、という勘ぐりさえ浮かんできた。自らが相手と話をしてアレンジしたその日のプログラムをシェアすることもなく、出迎えの手配もせず、翌日の会議でもイベントでのサイト。ビジット（現地視察）の変更も、またその件に課する説明、詫びや謝意も何もない、と言うのはどういう事なのか、明らかに考えている次元が違うとしか受け取れない挙動に見えて残念であった。

現地視察を予定していた「川の浄化」についてのキャンセルも、その後に別の候補地を探しているという情報から察すれば、予算がないというのは嘘で、コーディネータの勝手な判断でなされたと筆者理解している。国際交流に限らず、相互信頼は良好な人間関係を維持していく上で重要であるが、特に国際交流においてはさらに重要であることは周知であるが、この種の人にはいまだ分かっていないようである。就いたポストで何をするのが自分の役割かも理解していないようで、適当に（本当に慈雲の判断で適当に）処理している陽である。自ら学ぶ姿勢がないから、何を言っても「馬の耳に念仏」である。かといってよくなる方に打つ手がないからいつまでたっても進歩がない。この状況が日常化しているから、「井の中の蛙、大海を知らず」と言う状況に全く気が付かない。「これでよい」と言う自己満足がすべてで「評価は他人がする」という基本が分かっていない。学び勉強する意志がない。もちろん新しい事を学ぶと言う「興味 (Interest, Curiosity)」も「熱意 (Enthusiasm, Passion)」もない。

何事にも無関心で現在の自分のポストに「居座り続けたい」と言う気持ちが優先している。自分のいるポストが何するポストか、また何をすべきかと言う理解もないから、戦略、政策がないのも当然である。現地視察で参加者に何を見せるか、何を見てもらうか、そんな判断ができ様はずがない。どうして事業実施依頼者が、どうして2つの大学を選んだかはわからないが、ひょっとしてその知人が筆者の居ることにならなくても配慮してくれたのであれば筆者の気持ちは複雑である。事業実施の依頼、或いは提案が、大学からであろうと無かろうと、一旦実

施の方向で合意したのであれば、合意に向けて協力すると言う姿勢が無ければ進まない。協力とは何か、と言う中で最も重要なことは相互の合意にもとづき約束を守る、とりわけ決めた期限は必ず守る、遅れる場合は必ず前もって連絡し、相手機関に了解を得ると言うことである。基本的にこれが守れないと相互理解も相互信頼も深まらない。逆に、そんなに信頼のできない相手機関なら交流自身をやめようと言う事になる。そしてそれ以降の交流事業についての誘いや提案は他機関からは成されなくなる。大学がどんどんレベルダウンして行くのに気付かない。あるいは気付いても誰も言い出さないのか、言い出せないのか、その判断は外部の者に取っては極めて難しい判断を必要とする。気付いても言い出す勇気があるか、それとも首（解雇）を覚悟で低いレベルの改善提案を敢えてするほどの愚か者は居ない。大学を再発明 (Reinventing) しようと言う活動プロジェクトもあるが、その活動に加わっているメンバーのみならず大学の構成員が本当にそのように思っているのか 本当にそう思っているのなら驚きである。まさに異次元の世界に思えるからである。日本では大学は独法化されて 20 年余を数えるが、このような状況では到底生き残れないのが普通である。こうした所に独法化した大学とそうでない大学の大きな相違を見いだす事が出来る。しかしもっと良いことならともかく、現実が大きく異なり、目の前に起こっている状況に寂しさを隠せない構成委員もいるのではなかろうか。本報の冒頭にも書いたが、自らが積極的にやろうと言う 意志 (Will) が無いのにいくら目標を掲げて組織を作っても、それは「大学としてよくやっている」という表面だけの見せかけで有り、さらに言えば活動の実態のない組織に予算を投じている行為も批判され、再考を余儀なくされても仕方ない。この辺で本報のまとめをしておく。

- 1) 基本的にやる「意志」が無いのに組織を作っても成果が出る事はない。
- 2) それでも組織があると言う事は、実績を示すだけの作り物で敷かない。
- 3) その様な組織に予算を付けて温存しておくことに意味はないし、無駄以外の何物でもない。
- 4) これまでも既述してきたことであるが、実質的に大学を良くしようとする教職員研修プログラムならば未だしも活動実態のない組織は無用である。
- 5) $D = (I \cdot J \cdot K) \exp(E)$ は以前にも示した数式で有り、本来より良き機械設計を遂行する為に必要な要素を挙げて、何が重要であるかを説いたものである。またその考えは人生設計にも適用できるから人生を生きる上でも役に立つことを示し、E が最も重要な余魚である事を説いた。ちなみに D: Design, I: Information, J: Judgement, K: Knowledge, E: Enthusiasm である。このシリーズの既報で既に解説しているので詳細な説明はここでは省く。しかし最も重要な要素 (Factor) は E: Enthusiasm) であり、この値が設計の良否を左右する。

E の量 (或いは値) により、物事のできあがりである E が大きく異なることを考えると、当時者のやる気、熱意が如何に重要であるかがわかる。成果や実績を重んじ、出来上がった物事

の中身や本当の価値に関心を持たない人々の姿勢の中には、自らが「やりたい」と申し出て、それを他の関係者が認めると、「その後のことは自分達が全てを決めてもよい、自分達の思うように意志決定できる」と考えるケースが多い。周囲から見ると理解しにくい。なぜならやりたい、やらせてくれと申し出た本人、或いは機関、団体自身が、一旦認可を受けると勝手に振る舞うから、時間を守らず、何時も遅れて周りがやきもきしていても何処吹く風で我が道を行くという横暴振りである。やりたいと言う申し出に応じて認可したのにやらないのは「やる気」が無いのでは無いか、とその挙動に懐疑的にならざるを得ない。それでも対応が変わらないから「つきあっては居れない」という事になり、周りの大学や関係機関は次第に関係を切り、離れていく。そして大学自身のアクティビティが段々急速に低下し、ついには破壊する事になる。大学は教育研究を通じて人材を育成するのが役割である。あそこの大学は余り良くないが学生は優秀だという声も聞くが、それは殆どの場合極一部の学生に当てはまるだけで、大半はそうではない。大半は教員の背を見て育っているから、教員と同じような人材しか育たない。ここに教育の重要な点がある。では何故そうした大学が出来上がるのか？答えは簡単である。大学人、大学教員としてのプライド、尊厳、自覚、責任感、自信を有せず自らの保身を優先した生き方がそうした教員を創るのである。だから輩出される人材が社会常識から離れたエゴイステイックなパーソナリティを持った卒業生が多く成るのは当然である。さらに重要で且つ深刻なことは、そうして育成された人材は再教育しようとしても容易には変わらない。社会常識も国際感覚も有せず、ひたすら「井の中の蛙」であり、またそのことに気付かずに社会に出るのであるから卒業生も可哀想である。こうした事に気付いた者は未だしも、大半はそうした実態に気付かず、また知らずに社会に出るのであるから、憐れとしか言いようがない。「大学よ、目を覚ませ、University! Wake up!」

さて、本報において触れた現地視察候補地である川の浄化について付録的な逸話を付しておく。チェンマイは日本の京都と類似点が多い、地理的に見ても市街は盆地で有り周りを山で囲まれている。市街の中央を鴨川が流れているがチェンマイにはピン川が流れている。チェンマイは歴史的に古く、首都になった事は無いが京都と同じく古都である。旧市街は碁盤の目のような区画で通りが走り、昔を偲ぶ城壁と堀が残っている。また京都に似て主産業は観光である。旧市街の中を流れるメカ川はピン川の支流であるが居住地も有り、水の浄化が問題になっていた。チェンマイ大学の知人で教員の一人がコミュニテイと協力して川の水の浄化に取り組んできた。5年ほど前に一部下流の方が改修され、1年前にオープンしたと言う。新しい堰堤ができ水は臭いも無く清い流れを維持して居る。両側の堰堤には露店が軒を並べ、夜は危険防止の為の豆電灯のロープが足下を照らしている。ここに至る迄にかなりの年数を掛けたと聴いているし、知人のたゆまぬ活動がやっと実を結んだ一例でもある。この場所を別名でオタルと呼んでいる。日本の北海道の小樽にある運河を参考にした部分が多いのでこのように呼ばれている。

小樽の運河は札幌農学校（現在の北海道大学）出の広井 勇技師が設計して作ったと聞いている。今では環境に配慮したその設計思想に高い評価が集まっている。この小樽の運河に学ぶ所多々有りと判断し知人も多くを学んだと聴いている。広井 勇技師は数多くの土木工事を手がけている。教育者で有りまた実務家でもあった広井技師の一端をウキペディア (Wikipedia) から抜粋して以下に示す。

1890 年（明治 23 年）からは北海道庁技師を兼務し、函館港の築堤に携わった後、1893 年（明治 26 年）、札幌農学校の文部省移管・工学科廃止に伴い技師専任となり、小樽築港事務所長に就任、小樽港開港に向けた整備に従事した。冬の季節風で激しい波浪に見舞われる岸壁に対して、勇は火山灰を混入して強度を増したコンクリートを開発、さらにそのコンクリートブロックを 71 度 34 分に傾斜させ並置する^[8]「斜塊ブロック」という独特な工法を採用し、1908 年（明治 41 年）、1300m に及ぶ日本初のコンクリート製長大防波堤を完成させた。設計の際に用いた波圧の算出法は、広井公式と言われ現在も使われている。

工事中、勇は毎朝誰よりも早く現場に赴き、夜も最も遅くまで働いた。現場では半ズボン姿でコンクリートを自ら練る姿をしばしば見かけたという^[8]。この防波堤は、建設から 100 年以上経過した現在でも当時のままに機能しているが、たまたま結果として残ったという以上に、広井 勇技師の準備が周到だったと言える。コンクリートの強度試験は、当初 50 年、大正以降に改められて実に 100 年後まで強度をテストするよう、実に 6 万個の供試体が用意され、実際に 2005 年現在もなお強度テストが行われているからである。

1899 年（明治 32 年）、秋田港や小樽港の設計に感服した土木界の泰斗古市公威の推挙により^[9]、学外出身にも関わらず工学博士号を得て東京帝国大学教授となり、1919 年（大正 8 年）には土木学会の第 6 代会長となった。勇は土木界へ、堀見末子、青山士、太田圓三、増田淳、八田與一、久保田豊、田中豊、宮本武之輔、石川栄耀ら、20 年以上に渡り錚々たる逸材を送り出し、そのうち少なくない人々が海外へ雄飛した。学生への指導は厳しくも懇切で、教育者としての評価も高かった。「先生は毎日寝る直前に床を敷いて、明かりを消し、正座して 30 分間、今日一日精魂を込めて学生達を教育したか、反省して翌日の生活の糧にした」と伝えられる。上記に見られるように、かつて不毛の地であった台湾の嘉南地域を潤す烏山頭ダム大工事を成し遂げた八田與一も広井 勇技師から教えを授かった一人である。